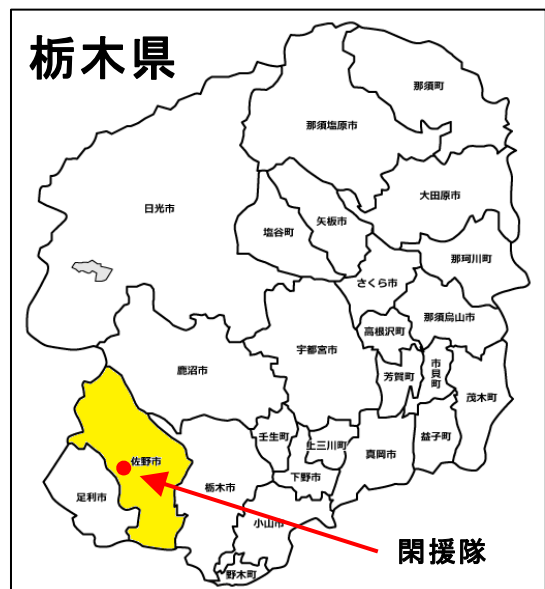




模経営が多く、後継者不足、過疎化・高齢化の進行、野生鳥獣による被害により、農地の荒廃が拡大している。

こうした一方で、閑馬地区は自然が豊かで、佐野市中心部からも自動車です30分程度と交通の便が良く、地元産木材を使用した地域のシンボル的な存在である旧閑馬小学校や磨墨の池などの地域資源もあることから、こうした地域資源や、自然に囲まれてのびのびと子どもを育てられる環境に魅力を感じ、首都圏をはじめとした地域外からの移住者も増えている。



写真 1 旧閑馬小学校

2. むらづくりの基本的特徴

(1) むらづくりの動機、背景

閑馬地区でも少子高齢化に伴う農業の担い手不足、さらには鳥獣被害の拡大による営農意欲の減退によって、今後も耕作放棄地の増加が危惧されている。農地の多くは農業振興地域の白地地域であることから、近年は後継者不在の日当たりの良い農地を中心に、太陽光発電施設が多く設置されるようになった。

さらに、明治6年に創立した旧閑馬小学校が令和2年3月末に閉校になることが平成27年に決定し、さらなる少子化の進行など地区の将来に不安を抱かせる事態が生じた。特に、後に閑援隊の隊長となる川元氏を始めとした移住者は、小学校のPTA活動等を通して地域に溶け込んできたこともあり、閉校に対する衝撃は大きなものであった。

こうしたことから、平成27年から「閑馬地区の課題を何とかしたい」という思いをもった地元有志が集い、川元氏を中心に「子どもたちが将来戻ってきたいと思える地域づくり」のため、農業に限らず地区の環境を維持する組織を作る検討を始めた。

平成29年には、旧閑馬小学校の跡地利用に地元意見を反映させるため、川元氏が発起人となり、当時の小学校PTAや自治会などを集めて「閑馬小学校の跡地利用を考える会」を設立し、閉校後の小学校の活用方法について検討を始めた。

閉校が2年後に差し迫ったことから、荒廃していく地区の現状に危機感を募らせた地域住民の有志7名が、よりスピーディーに意思決定し活動を行う体制を作るための検討を重ね、閑馬小学校PTA参加者などを中心にそれぞれの友人・知人に協力を求めた。

その結果、地元在住の農業者をはじめ、自営業、会社員や他県在住の医

療系、造園業など様々な業種、地域から 17 名が集まり、平成 30 年 4 月「より暮らしやすい閑馬を目指した地域活性化の活動」をモットーに、「閑援隊」を設立した。

設立後は、地域住民と協力し、地域一体となった活動を目指して、耕作放棄地を活用した米作りを開始した。また、地域への愛着や誇りを持ってもらうため、外部から見た本地区の魅力やそれを外部に知ってもらうための情報発信の重要性をテーマに、地域住民を対象にした講演会を実施した。それらの活動で住民の地域への意識が変化しただけでなく、閑援隊の活動に対して地域内外の多くの賛同が得られた結果、隊員は現在 34 名に至っている。



写真 2 耕作放棄地の整備



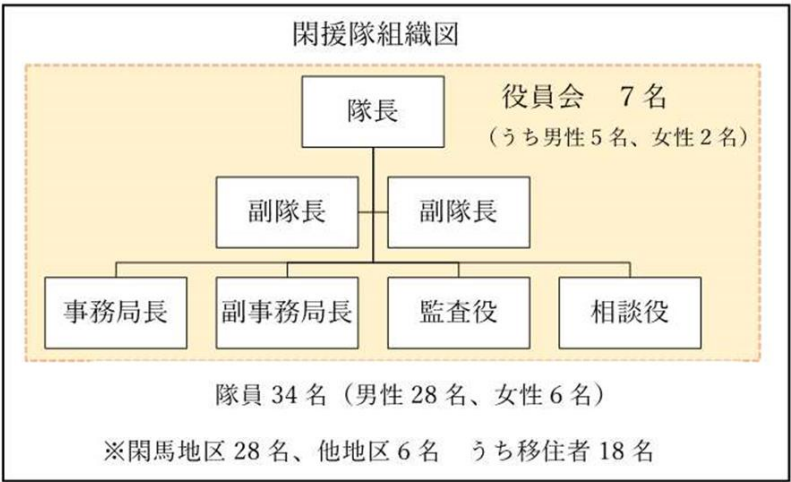
写真 3 田植え

(2) むらづくりの推進体制

ア 組織体制及び構成員の状況

隊の執行部は、隊長 1 名、副隊長 2 名、監査 1 名、事務局 2 名、相談役 1 名となっており、隊員は 34 名（令和 4 年 2 月現在）で、男性が 27 名、女性が 7 名であり、地区別では地区内が 28 名、他地区が 6 名、年齢層は 20 代～60 代で、中心世代は 40～50 代で 20 名を占めている。

第 2 図 むらづくり推進体制図



隊の運営は、年に 1 回総会を実施し、活動の振り返りや年間活動計画を策定しており、定期的な会議等については、コアメンバー数名を中心として、年に 4、5 回程度行うほか、主要行事前にはメン

バーとも意見を出し合いながら進めている。

隊員の半数は移住者で、コアメンバーを含む大多数が県外出身者であり、移住前の豊富な人脈から新たな活動の種が生まれることが大半である。

また、自立した運営を行うため、設立当初から隊員からの会費と収穫したお米の売上などを資金源にして活動している。設立当初は自ら農作業で活躍できる隊員が多かったが、農作業に自信がない人でも加入できるよう、令和元年に準会員という区分を設けたことで、広報など幅広い分野を得意とする会員が集まり活動するようになった。

イ 連携してむらづくりを行う他組織等との関係

① 地域活性化の取組

都市住民へ農業体験の場を提供している「シンセキ村」の活動のサポートや、「閑馬上区里山を守る会」と連携して獣害防止対策として侵入防止柵やヤギの放牧場を設置するなど、農地の荒廃を防ぐ活動をしている。

さらに、地域の主婦や作家による手作り作品販売イベント「閑の里」において、収穫したお米などの農産物の販売や隊の活動のPRを行っている。

② 地元への観光推進の取組

地域への誘客促進のため、「さのアグリツーリズム推進協議会」と連携し、中山間地域と都市部をつなぐ観光プランを作成するとともに、今後のインバウンドの受入れに向けて、「佐野農業協同組合」や「両毛ムスリムインバウンド推進協議会」と連携し、サウジアラビア等からの農泊体験を実施し、受入れに関するノウハウを蓄積した。

③ 福祉事業所との連携

海洋プラスチック低減と農福連携を組み合わせた取組「ふぞろいのストロープロジェクト」（（一社）広域連携事業推進機構主催）に賛同し、隊員の知人が運営する市内の就労継続支援事業所「Happy Happy」と協力し、令和3年11月にライ麦の栽培を開始。同事業所とは令和3年から広葉樹苗木作りでも連携し、就労の場を創出している。

また、隊員の知人が運営し、障がい者の家族が心を癒やせる活動をサポートしている「NPO法人親子はねやすめ」の拠点設置に協力するとともに、その管理を行っている。



写真4 ストロープロジェクト

■ むらづくりの特色と優秀性

1. むらづくりの性格

閑援隊が活動する閑馬地区は、日本の原風景とも言える山あいの田園風景が広がる魅力ある農村地域であるが、少子高齢化や農業の担い手不足、鳥獣被害の拡大、耕作放棄地の増加など、多くの課題に直面している。当団体では、こうした地域の課題を解決するために、首都圏をはじめとした地域外からの移住者が地元住民と一緒にあって、彼らの広い人脈や行動力、これまでのスキルを遺憾なく発揮し、閑馬地区の活性化に向けた活動を実施している。

また、耕作放棄地を水田などに活用し、地域の農地を守るだけでなく、農業体験・農泊ツアー等の都市農村交流や、甘茶栽培等新たな地域資源の創出による収入確保など、地元住民や関連団体と連携し、多種多様な活動を展開している。

当団体によって、閑馬地区全体を盛り上げる継続的な活動が実践されており、今後もさらなる発展が期待できる。

2. 農業生産面における特徴

(1) 耕作放棄地を活用した農業生産活動

平成 30 年から耕作放棄地 20a を整備し、隊員をはじめ地域住民と協力して水田として活用している。栽培は、農業を営む隊員や地域の農家から技術等を学び、隊員同士が教え合うことで技術を向上させており、定期的な除草管理を行うことでなるべく除草剤を使わず、おいしいお米づくりを心がけている。

お米以外にも、耕作放棄地を活用した新たな地域資源を創出するため、令和元年 6 月には、ブルーベリー(4a)を定植し、地域の子どものお年寄りが摘み取りできる憩いの場として整備したほか、令和 4 年 5 月には、鳥獣被害に遭いにくく、隊員が自らの経営で実践している甘茶の栽培を行うこととし、甘茶畑(27a)を整備した。収穫した甘茶は乾燥させて販売し、新たな収入源とする計画である。

また農作物の栽培に限らず、「閑馬上区里山を守る会」と連携し、協働でヤギの放牧場(約 10a)を整備し、雑草抑制対策として農地の維持管理に役立てている。

令和元年 5 月には放置されていた竹林 10a を整備し、孟宗竹を利用した新たな加工品として“メンマ”作りに挑戦してい



写真 5 甘茶定植



写真 6 メンマづくり

る。今後さらに竹林の整備を進め、将来的には独自ブランド“カンマメンマ”として販売することを構想している。佐野市は「佐野ラーメン」が有名であるが、使用するメンマの主要産地は中国産であるため、地元佐野産のメンマを使用することでさらなるPRにつながると期待している。

（２）後継者の育成・確保、女性の経営・社会参画

地域の担い手、後継者を確保するために、定期的にホームページやSNSで活動状況を情報発信し、本地区や地域活動に興味のある若者を呼び込んでおり、その結果、隊員の中心世代は40～50代で若手のメンバーも多く、首都圏の企業や地域おこし協力隊から新規加入したメンバーもいる。

閑馬小学校は令和2年度に閉校となったが、将来、地域に戻ってきたいと思ってもらうために、今後も課外授業など地域環境学習の場を設けていくことで、地域への愛着心を育てていく予定である。

米作りやメンマづくりなどの隊における協働作業は、隊員の家族と一緒に作業している。大人が楽しんで作業することを体現し、子どもの頃から本地区の魅力を感じてもらえるようにすることで、将来本地区に戻ってきてもらえるように活動している。

また、役員には女性を登用し、活動における仕事分量の範囲やペースを無理なく行えるよう、女性ならではの目線で隊の活動を良くするためのアイデアを提案し、活動に反映させており、女性の隊員は約2割であるが、近年は女性の参加が少しずつ増えるなど今後の増加に期待している。

実家から離れていた20代の女性は、ホームページやFacebookで閑援隊の活動を確認し、「大好きなこの地にいずれ帰って来たいから」との理由で当団体メンバーに加入した。

3. 生活・環境整備面における特徴

（１）歴史的資源の認知度向上と遊休施設の有効活用

本地区には地区の名前の由来とされる「磨墨の池」があるが、周辺が未整備であり、地元住民ですら存在を認識していない状況であったため、令和元年8月、地域の歴史的な地域資源として認知度を高め、人が訪れることができるように、池周辺に案内板や階段を設置した。それにより地域住民の認知度が上がりつつあり、今後の活動での活用方法を検討中である。

また、活動の連携団体の「NPO法人親子はねやすめ」が、佐野市での活動拠点を設置するにあたり、閑馬小学校近くの空き家を紹介しその整備を協力した結果、現地での管理団体として物件の管理を任せられ、閑援隊の活動拠点「はねやすめ」としても活用できることにな



写真7 はねやすめ

った。

「はねやすめ」の設置や耕作放棄地を活用していくことで、人が集える場が整備され、地域の人々が自然にコミュニケーションをとる場面が増えている。

（２）都市住民との交流等

本地区における都市住民との交流促進に向け、「さのアグリツーリズム推進協議会」と連携し、中山間地域での農村農林業体験と都市部をつなぐ観光プランを作成し、コロナ後の実施に向けて準備を進めている。

また、国内のみならず、海外にも本地区の魅力をPRしていくため、「佐野農業協同組合」の呼びかけに応じ、「両毛ムスリムインバウンド推進協議会」と連携し、今後のインバウンドの受入れに向けて、サウジアラビア、マレーシア、シンガポールからの農泊体験や農業体験の受入れを実施するなどノウハウを集積した。

令和元年台風やその後のコロナ禍により、地域外からの観光客等の積極的な受入れは実施していないが、隊としての農業スキルの向上や、アフターコロナの受入体制整備を着々と行ってきた。佐野市では、閉校した一部の小学校の跡地利用について、公募型プロポーザル方式で業者を選定する予定であり、隊として旧閑馬小学校の活用に携わり、地域活性化につなげるため、法人化の準備も進めている。



写真８ インバウンド受入れ